

素晴らしい須走を知りたい!

「すばらしい隊」初級養成講座 第1回講座

■日時

平成 29 年 11 月 12 日 (日) 13 時～16 時

■場所

富士浅間神社 社務所

■講師

勝亦 直己 富士山世界遺産ガイド



■講義概要

1. 富士山の歴史

- 御殿場で町おこし団体の理事をしており、ガイド養成講座を実施している。配布した資料はその講座の際に作成したものである。
- 富士山を知ろうとするといろいろな切り口があり、1つのジャンルだけでは話ができない。様々な分野からの分析が必要である。富士山は1つの山ではなく、下に3つの山がある。先小御岳、小御岳、古富士。山中湖から見ると両肩が出ているのでその構成が分かる。これがなかったら3000m級の山にはならなかったと言われている。現在、富士山は日本で一番威張っている山だが、歴史的にはそんなに古くない。太陽系が約46億年前に誕生した。箱根や金時山が約70万年前に誕生。小御岳、古富士が20万年、30万年前にでき、今の形になったのは約2200年前なので、富士山は比較的新しい山である。新しいが、単独峰なので非常に人気がある。単独で立っている山は目立ち、そこには何かがある、と昔の人は考えたようだ。昔から日本人に注目され、人気の山である。
- 富士山の最古の噴火は、781年。記録に残る噴火は10回。そのうち、800年「延暦の噴火」、864年「貞観の噴火」、1707年「宝永の噴火」が三大噴火と呼ばれている。噴出しているマグマの量が7億m³とか13億m³とか想像もつかない量だと言われている。
- 800年の噴火が須走に関係があり、山頂噴火とも言われ、須走登山道の上の方で噴火したとも言われている。溶岩流が流れ、足柄道が封鎖された様だ。
- 864年の噴火は、溶岩流が青木ヶ原の方に流れ、それ以前は富士4湖で山中湖、河口湖、^{せのうみこ}剱海湖、本栖湖だったが、剱海湖の中央部が溶岩で埋もれ、その両端の湖が西湖・精進湖になった。

—1707 年は、溶岩流はあまりなかったが、火山灰がすごかったらしい。宝永火口が第一、第二、第三とあるが、噴火した順は、第二、第三、第一の順。宝永山は、噴火によってできたわけではなく、噴火によるショックで隆起した山である。

—昔、富士山は山頂から火を噴いていたが、山頂ではなく山の中腹から火が噴いたので、それはすごかったでしょう。それとともに、火山灰で街中は真っ黒になるし、息苦しくなるし、とんでもない自然災害だったと思う。宝永噴火の被害額は今の額に換算すると、2兆5千億円になると言われている。

自然が相手なので、どうしようもない。日本の下にはプレートがあるので、それが悪さをしている。

—その後の富士山は、1966年にBOAC機が墜落、死者124名。破片は御殿場駅まで飛んできた。1972年御殿場口で全層雪崩が発生し、死者24名。富士山はアイゼンも効かなく、滑落すると五合目まで止まらない。ぜひ、それなりの装備をして登っていただきたい。そして2013年世界文化遺産に登録された。

2. 文化人類学的にみた富士山

—日本人と富士山の関わりは、(1)～(5)期に分けられる。

(1) 遥拝期

—縄文時代、遠くから富士山を崇めて拝んでいた。須走も富士山が真正面に見えるので、遥拝所であったと思われる。^{おおしかくぼ}大鹿窪遺跡※1、^{せんご}千居遺跡※2、高尾山、などが遥拝所だった。

※1 旧芝川町にある縄文時代草創期の集落、定住集落遺跡としては日本最古級、国指定史跡

※2 富士宮市にある縄文時代中期の集落遺跡。ストーンサークルが特徴で国の史跡

—山に神様がいると思うようになったのはいつごろなのか。縄文時代の人々は、神という言葉がなかったものの、山には雨を降らせるすごいものがある、雷を興すすごいものがある、自分たちではないすごい者がいると思っていた。また蛇に非常に強い関心を示していた。蛇は脱皮して新しくなっていく。縄文の言葉を研究している先生が縄文時代、蛇のことを「ムイ」と言っていたのではないかと言っている。頭に「カ」が付いて「カムイ」と言われていたのではないか。アイヌの人たちは蛇のことをカムイと言っていた。それが変わって「かみ」となったと言われている。神の対象が蛇であった様だ。

—縄文時代、人々は不思議なものが山やその麓にいたり、編んだ草で区切り、そこから先は神聖な場所で、入ってはいけないという決りを作り守っていた。草がしめ縄に変わっていったが、意味としては、脱皮し生まれ変わる蛇。縄文時代の人々は、生と性にすごく興味があったようだ。命が宿ること・生まれてくること・命をはぐくむことを彼等なりに研究し生活の拠り所にしていたと思われる。

(2) 畏怖期

—恐れおののくという意味の「畏怖期」。奈良時代から平安時代にかけて噴火をしている富士山は怖い山だと思っていた時期である。仏教が入り、仏教の教えと、昔から神様を信じている教えとが少しずつ一緒になり、現在でいう「天国」「現生」「地獄」的な見方が生まれ始める。

—火を吹く怖い富士山にも神様が住んでいる。富士山の神様は、最初は浅間の大神、そして大日如来、不動明王など変わっている。そして江戸時代、国学者林羅山が自分の書物に富士山の神はコノハナサクヤヒメだということを書いた。この頃から富士山のご祭神はコノハナサクヤヒメが定着した様だ。また「富士山で修験をして魔法のようなものを身に着きたい」と考え実践した者のハシリが役行者である。

(3) 欣求浄土期

—「富士山に登って生まれ変わりたい」富士山をその様に捉え始めた時期である。身も心も洗われることを願う穢れのない白装束を着て富士山に登る。須走にも滝の付く地名があるが、富士山に登る手前

に滝があり、そこで体を清めていた。山岳信仰としての富士山修行が富士講として広まった時期である。

(4) 近代登山の黎明期

—1800年代、近代登山の黎明期。ヨーロッパではマッターホルンに初めて登ったのがこの時期。日本では駐日公使、大使という人たちが山に登り始めた時期である。富士山の登山口は現在より多く、修験の山からスポーツ登山になり始めたのが、この近代登山の幕開け、つまり黎明期である。

(5) 黄金期

—富士登山や富士山の活用が活発になってきた時期が黄金期である。1895年10月1日から野中夫妻が山頂にて厳冬期気象観測を実施、1910年クラッセルが太郎坊にてスキー練習、1964年富士山頂レーダー設置。1999年（平成11年）11月1日に山頂レーダー運用終了、2013年世界文化遺産に登録である。

—ブルドーザーが登ったり、山頂に自動販売機があつたりするので、自然遺産では登録できなかった。しかし、古くから芸術の対象になり皆の信仰の拠り所になったということで、文化遺産で申請したら17番目の遺産として登録された。世界遺産になる前から文化財保護法・自然公園法というのがあり、勝手に看板を建てたり、木を切ったりしてはいけない山。昔から管理され大切にされていた山が富士山。そういうことが評価され世界文化遺産に登録された。

3. 世界遺産について

—日本では文化遺産が17、自然遺産の日本初は白神山地、そして屋久島・知床・小笠原となり、合計21。少し気になるのが危機遺産、世界で54ある。バーミヤンの遺跡がISの爆弾で破壊されたり、中東の戦争によってエルサレムの旧市街地がボロボロになったり、ドイツでは街中がすごい交通渋滞で世界遺産としてはどうか？というもの、それが危機遺産である。

—実は富士山も、いくつかの課題をクリアしないと世界遺産登録を取り消されるという条件付きである。

○1つには、登山者が集中し過ぎること。夏の2か月で25万人。登る人をもう少し分散化する方法を考えなさいということが1つ。

○登山道が灰に覆われているので、それをしっかり確定しなさい、というのが1つ。

○富士山にブルドーザーが登っているのはどうか？と言われている。ヘリコプターが乱気流の影響で上げられないので救助の時、また山小屋の運営からするとブルドーザーは必需品なのだが、イコモスの人から言わせると、それはどうかということ。

○来訪者に対して情報提供・学習させなさい、というのが1つ。今年の12月23日静岡県側にやっと富士山世界遺産センターがオープンする。しかし噴火のことも考えないといけないと思う。現時点で何人入って、何人下山しているか、という登山者管理が全くされていないのが現状。ヨセミテ国立公園はIDカードがあり、今の状況がすぐに分かるようになっている。ビジターセンターと言って世界遺産のことを勉強する施設としては良いが、登山者管理についても今一つ踏み込んで欲しい。

4. 御殿場・小山の歴史について

—須走はなかなか書物には出てこない。701年「五畿七道」の整備計画により御殿場に横走駅ができる。

東海道の起点は近江国勢多駅（琵琶湖瀬田川大橋近く）、終点は常陸国国府（茨城県石岡市）であるが、細部は現在の東海道と少々異なる。北駿地方付近の経路は、長倉、駒門、横走、竹之下、足柄峠、関本、国府津、大磯、厚木街道、常陸国の国府へと続いた。

—800年富士山頂から大爆発。東海道足柄峠の道は埋没し閉鎖された。迂回路として筥荷途（箱根路）が開かれる。迂回路は、横走駅を基準に乙女峠・仙石原・俵石・碓氷峠・明神ヶ岳・大雄山・関本、

伊豆国府・箱根・小田原路など多数の説があるが、東海道が付け替えられた事は事実。

ー864年にまた噴火。鳴沢方面大被害。899年相模足柄坂に関所を置く。1193年源頼朝、富士野で巻狩りを行う。赤塚、黒塚などは、その時旗を立てた所とされる。神奈川～足柄峠を通過、富士山へ向かう。今国道になっているところは、昔から使っていた道である。また古道には集落と集落の境に道祖神（道の神様）、塞ノ神（村の村に入ってくる悪いものをふさいでくれる神様）がある。道の辻には今でも残っている所があるので歩いてみてほしい。

ー須走でいうと、現在のJAの場所に料金所があったようだ。江戸時代、1618年には箱根に関所を置く。1703年関東に大震災が起こった。1815年伊能忠敬 静岡県東部各地を測量する。「伊能図」は60m×30mの大きなものである。その時富士山の高さの測量は3892m。人の行き来がすごく多くなった時期で、富士講が流行していた。関東から一番近いのが須走なので、富士講のたくさん人たちが訪れた。富士講をつかさどった人が「御師」。須走は17軒、須山12軒、河口118軒、吉田86軒と言われている。

ー明治になり廃藩置県、神仏分離令により、須山・保土沢・印野が神道葬となる。1883年に御殿場口登山道が開通し 1889年に東海道国府津駅⇄静岡間開通、東海道鉄道の御殿場駅ができ、御殿場口から登る人が増えたため須山口が少し廃れた。1912年小山町誕生。1956年須走村が小山町に編入される。県境に籠坂峠があるが、須走の町に山梨県(郡内)の慣習が混在していない一面もあり不思議な気がする。

5. その他

ー雑談その5、御殿場の地名。家康の別荘が県内では8か所。そのうちの1つ、「御殿場御殿」は県立御殿場グラウンド～正門～吾妻・穂見神社あたり。御殿があった場所で「御殿場」というわけ。

ー雑談その6、富士山の湧水。富士山は年間約25億トンの降雨、降雪を受け止めている。25億トンのうち3億トン程が蒸発するので残り22億トンが地下水脈に。降雨・降雪から浸透、ろ過、滞留、湧き出るまでの時間は数年から100年かかるらしい。湧水スポットとして、新橋浅間神社境内、駒門パーキングエリア内、駒門風穴、駒門パーキングエリア内、道の駅すばしり、道の駅ふじおやま他がある。富士山腹は噴火の堆積が多く平地に比べて地面を150～200mも掘らないと湧水にたどり着かない。須走地区もその一つだが、演習場内の滝の台辺りは水場である。

ー雑談その7、「合目」。登り口によって表現が違っているので、統一させたい。今、山頂までではなく1合目から5合目までをじっくり歩きたい人が増えている。吉田、須走に旧道が残っている事は魅力。

資料：富士山が世界文化遺産に登録されるまでの経緯

ー富士山に関わる構成資産は、2007年静岡県側198件・山梨県側121件があり、2008年にその中から66件を選び出した。2011年、最終的に25件とした。

ー富士講の詳しい話は次回である。講とは、特定の目的をもって組織を作った村の集団。富士講と縁が切れないのが大山講。富士山が「コノハナサクヤヒメ」を祀り、大山が「大山津見の神」を祀っているので片方だけお参りするのは「片参り」と言って忌む風習があった。

ー登って来た所から降りるのが良しで、吉田口から登り大宮口に降りる等山頂を真っ二つに割るような登り方は縁起が悪いのでやめましょう、という風習もあった。「御山割り」と「片参り」を富士講の人は勧めていなかった。富士山(陽)と大山(陰)を大山講と言って江戸時代セットで売っていた。富士山を語るとき、大山のことも語ってほしい。

ー富士山を含め日本の山にはなぜ女人禁制だったか。修験している人は男性なので、山中で女性の姿を

見ると修行に集中できないということだったのかも知れない。女人結界は、昔の2合目辺りにある。須走では、雲切神社が女人結界だったという説がある。富士宮、御殿場口にも残っている。明治になり女人禁制が解禁になった。

―昔は登山道が7～8本とたくさんあった。その殆どが起点は麓の神社。各登山口は、西暦1000年くらいに確立されていたと思う。

―御鉢めぐりとお中道。山頂に3回以上行った人でないとお中道に行けないと言われていたが、現在は大沢崩れで回れない。

―物理的に富士山は240km位、離れた所から見える。京都位だろうか。

―太郎坊、次郎坊は、守り神として山に住んでいる天狗と言われ、兄弟の天狗で猿田彦である。富士山の5合目より上は、神域であるので太郎坊と呼んでいる。

―林野庁が全国90か所にある国有林の多目的利用のために自然休養林をつくっている。「富士山自然休養林」には13コースある。小富士コース、まぼろしの滝コースなど森歩きのコースがある。小富士コースはととてもすがすがしい。森林にはリモネンなどの物質が多く出ていて、リラックス効果がある。ぜひ行ってみたい。

―富士山は色んな切り口があるので、聞かれたときに「後で調べておきます」とならないようにたくさん勉強してほしいと思う。

以上